

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the Etymology of the Japanese Word Syabon 'soap'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISIWATA, Tosio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001717

シャボンの語源

石綿敏雄

1 シャボンの語源諸説

シャボン（石鹼）の語源は大日本国語辞典によると、外来語であってポルトガル語 *Sabao* スペイン語 *Jabon* フランス語 *Savon* が日本語にはいったものとされている。大言海でも同様である。このうちフランス語から来たものであるとする説は村上直次郎、前田太郎、新村出^{注1}などの諸氏によって否定された。シャボンの語は日仏両国が接触する以前に既に日本にはいていたのである。

村上直次郎氏は日本外来語辞典において、ポルトガル語スペイン語の両方をあげておられる。このようにこの両語を共にあげる説もあるが、多くはスペイン語ポルトガル語のいずれか一方から来たとするようである。

ポルトガル語源であるとする人にはまず前田太郎氏がある。氏は「外来語の研究」においてシャボンの語源にフランス語、フランス・スペイン両語、ポルトガル語の三説があるとし、フランス語説を否定した後次のように言われている。

西班牙語源説の生ずるに至つた理由は、自分の揣摩する所では、唯だ漫然と西語 *jabon* の形式にのみ着眼したためではなからうか。けれども今国語シャボンサボンを写した手本としては、その語頭字 *J* よりも、葡語 *sabão* の *S* の方が、より大なるプロバビリティを持つて居るのみならず *bão* の如き *a* にチェック・サインを施してある場合は、これに発音符を与へると *bown(g)* となることは、恰かも *pão* が *pown(g)* となると同一轍であると云つてよい。故に音韻上から解釈を試みると、寧ろ葡萄牙語と定めた方が適切である。その上、馬來語 *sabun*^{注2} も葡萄牙語から出たものである事などを参考にすると、愈々葡萄牙語源説の確実なることを認め得るのである。自分は如上の意味で、村上氏の所説に左袒するのである。(140ページ)

外来語研究の諸家にはポルトガル説が多い。新村出、荒川惣兵衛、榎垣実、重久篤太郎などの諸氏はそれぞれの著書でポルトガル語として取扱われている。

註³ 荒川氏の外来語辞典でもポルトガル語が直接の原語であるとされている。

国語学の概説書類でもポルトガル語説が多い。小倉進平、金田一京助、小林好日、岩淵悦太郎、平山輝男、松村明などの諸氏もそのように取扱われているようである。註⁴ 辞書類でも最近の明解国語辞典、辞海、広辞苑、新版広辞林などいずれもポルトガル語としている。このようにポルトガル語とする説はきわめて多い。

これに対してスペイン語であるとする説は多くない。辞典類では新訂版広辞林(昭和9年)、辞苑などである。前述のように村上直次郎氏は日本外来語辞典ではポルトガル語を先にして両方をあげておられるが、その後次に次のように補足されている。

石鹼ハ早くヨリ正倉院御物中ニアリ。慶長十七年の目録ニモ「シャボン」ノ語見エタリ。又曲亭馬琴ノ夢想兵衛胡蝶物語、後編、卷之二、煩惱郷ニ「人生レテ善ニ進ハ少ク、悪ニ進ムモノノ多キヲ論シニハ童子ガ竹ノ管モテ吹ク、シャボントイフモノコレニ近シ」トアリ、故ニ是迄行ハレタル仏蘭西語ヨリ出デタリトスル説ハ採ルコト能ハズ、印度及南方諸島ニテハ「サバン」ト称フル所アレドモ、多クハ「サボン」ト称フ。但シ何レモ葡語「サバン」ヨリ出デタリトナスベキカ。我邦ニテハ「サボン」ノ形式ヲ見ズ。「シャボン」ノ称アルハ西語ヨリ出デタルニアラズヤト思ハルル所以ナリ。蓋シ西語ニテハ、古ク j ノ代リニ x ヲ用キタルコト多ケレバ Jabon モ Xabon トシタルナルベク、従テ当時多ク西班牙ニテ製造セラレタル石鹼ガ我邦ニ輸入セラレ、葡語ノ例ニヨリテ「シャボン」ト称ヘラレタルモノナルベキコトハ、最モ自然ナレバナリ。

このように村上氏はスペイン語ではないかと疑っておられるがやはり最後にそのとなえ方はポルトガル語であるといわれている。これは岡田章雄氏がラジャはもとスペイン語であるがポルトガル貿易によって日本へもたらされたといわれる 註⁵ のと似た考え方であろうか。j が x と書かれたであろうといわれているのは卓見であるが、その発音に関しては言及されなかった。

江馬務氏は「江戸時代風俗史」ではフランス語であるといわれていたが、註⁶「風俗辞典」では「日本へは16世紀にヨーロッパ人によってもたらされ、イスパニア語「シャボン」がそのまま日本語になった」といわれている。ただし語源に関する説明は以上のものだけであってくわしい説明はないようである。

ここで注意すべきはシャボンには江戸時代に「サボン」という形式があったことである。シャボンの語源を考えると、サボンも共に考えなければならぬ

い。

2 古文献の用例

サボン・シャボンの両語形は古文献にどのように現われているか。サボンは荒川氏の外来語辞典によれば西暦 1708 年の増補華夷通商考Ⅲ、1807 の環海異聞、栗園漫抄、1853 の通航一覧に引かれた崎陽日録、1853 の守貞漫稿、高野長英の客中安証、1867 の福沢諭吉の西洋旅案内に現われている。根岸川柳「古川柳辞典」にはサボン売の語があり、用例があるが 1 例のみである。

シャボンは 1763 の物類品隋、1777 の和訓栞、1799 の蘭説弁惑、1837 の高野長英の避疫要法、^{註7}洛陽集、馬琴の夢想兵衛煩惱郷に出ている。大曲駒村「川柳大辞典」のしゃぼん、しゃぼん売、しゃぼん玉の項には総計 8 例ほどの江戸時代の川柳に現われた例が引かれている。根岸川柳「古川柳辞典」にも例がでており大曲駒村氏のと重なるものであるが、その出典は柳多留拾遺、川傍柳 1 と明記している。また洒落本の「ぐにんをとこあつかりがね愚人漢居続借金」(天明三)の例を示している。また大言海には嬉遊笑覧の例があがっている。

上は辞典類によったものであるが、江戸時代の文学では、比較的古いものとして外に例を求めると、

ちらし葉や風のくれ竹

均朋

しやほんふく夕のひかりゆく螢

素敬(大坂檀林桜千句)

洗濯 川辺 灰汁 しやほん

(毛吹草 三付合)

のような例がある。

南蛮貿易時代のものとしては、筑前神谷文書に博多の宗湛から石田三成へシャボンを贈ったのに対する三成の礼状に「為_レ見舞_レ書状并しやほん二被_レ贈候……」とあり、後文中に地震に関する記事があることから 1596 年のものと考えられている。^{註8} そのほかに家康の遺物目録たる駿府御分物御道具帳の中にもあり、^{註9}また村上氏が指摘されたように慶長 17 年の目録にもあるという。すなわち 16 世紀のごく末、17 世紀初めの例とみてよからう。

このような例をみると、サボンの例も多いがシャボンの例もまたすくなくないのであって、川柳辞典にはシャボンの例が多く引かれており、江戸前期の文

学でもシャボンの方が多く、南蛮時代のものではシャボンの方が優勢である。それゆえシャボンがサボンからなまったものと考えるのは自然でないように思われる。またこれらの用例の古さと、日ポ、日西関係から考えて、フランス語でないとは断定したのと同じ根拠からは、ポルトガル語でないとも、スペイン語でないとも、断定することはできないであろう。

3 原語の発音

外来語の語源を考える時、原語の発音について考える必要がある。そこでポルトガル語 *sabão*、スペイン語 *jabón* の発音はどうかというと、前者は [s-abẽu] であるが後者は [xabon] であって（アクセントは両者共第二音節）、この点からみるとポルトガル語の方が近いように見える。スペイン語の語頭子音は日本語にない音であるが、ドン・キホーテ、ドン・ホセ、ドン・フアンのように人名などでは大体へ行で書かれるし、この音はドイツ語のでもバッへ、コッホ、ロシア語のでもフルシチョフ、へバロフスク、（広辞苑によればロシア語の）アストラカンとなるように、多くへ行に書かれ、またカ行に書かれることもあるが、サ行系統になることはまずない。

但しこれは現代の発音であり、往時のはこれと同じではなかったのであってイベリア両言語における発音の歴史を考えてみなければならない。さて *sabão* も *jabón* もフランス語の *savon* と同源の語であって、いずれもラテン語の *sapo* から出たのであるが、ワルトブルクのいうように名格形でなく対格形 *saponem* から出たものらしい。^{註10} その語尾 *m* の消失と、イベリアの母音間の *p* 等の有声化は非常に古いものであった。

ポルトガル語においては中世より母音 + *n* 等の鼻母音化が著しく、語尾 -AN E, -ANU などは -ão となったが、15世紀には -ONE から来たものも -ão に合流したらしい。^{註11} 従ってポルトガル語では、当時のと現代のとで、発音にほぼ差異がなかったものと考えられる。s- はそり舌音でカモンイスの時代には -s- と発音が少し違っていたらしいが、その s-, -s- は x とは混同されることなく、明かに区別されていた。わずかにモサラベや北方の方言において混同される傾向があったが、それはもちろん特殊な発音とみてよいのである。^{註12}

これに対してスペイン語では特に頭音に著しい変化があった。まずアラビア人の侵入によって生れたモリスコの発音の影響を受けて、*s* が *š* に変わり、通例 *xabon* と書かれた。^{註13} 更にこの音はいわゆる黄金時代に *ʒ* に変わった。そしてそれが現代に及んでいるのである。

ところで日本にスペイン人が来たころのはハボンかシャボンか、*š*→*ʒ* の変化はいつ行われたか。これについては古い *j, g* も関係してくる。*j, g* は古く *dʒ* の音で英語の *j*、イタリア語の *gi* に近いものであったが、最初母音間で、後には他の場合にも *ʒ* となりポルトガル語の *j* と同様の音になった。その対応無声音は *x* で *š* の音、英語の *sh*、イタリア語の *sci* であった。さて *j, g* は次第に無声化して *x* と混同されるようになった。^{註14} そして発音部位が後退して今日の *ʒ* と同様になったのであり、これは大西洋の両側においてそうであった。^{註15} 16世紀後半、17世紀前半はまさに *š*→*ʒ* の過渡期であった。

x と *j* の混同については、ブルシエはカスティーリャ・ラ・ビエハでは16世紀の終ごろであったが、トレードでは1640ごろまでこれを区別していたといい^{註16} アマド・アロンソは *s*—*ss*, *z*—*ç*, *j*—*x* の *correlaciones* は16世紀中に失われ *x* と *j* は同一になったという。^{註17}

x の新しい音については、ブルシエは1560まではすべての文法家はスペイン語の *x* をフランス語の *ch* に比較しこの間に特別の区別があるとは認められないとっており、軟口蓋摩擦音になったのはその後であるという。^{註18} R・メネンデス・ピダルは、新音は古く16世紀の初めに文証されるが、無声軟口蓋音が優勢になったのは17世紀の初めであるとし、^{註19} ラフェエル・ラペサは新しい発音は16世紀の終以来文証されるが、しかし硬口蓋音と入れ替りながらであり、ある期間の間は硬口蓋音の方が優勢 (*preponderante*) であった。だから1605年に書かれた *Quixote* (ドン)キホーテがフランス語では ^{キシヨツト} *Quichotte*、イタリア語では ^{キシヨツテ} *Chisciotte* となっはいつているといい、17世紀の最初の3分の1ほどが終るころ *ʒ* が課され1659年には王宮に用いられて、硬口蓋の *š* の古い音は非カスティーリャ語に追放されたといっている。^{註20}

ラフェエル・ラペサの論証にはフランス語イタリア語に与えた語の例が用いられているが、これらの言語には *ʒ* の音がないので、その点スペイン語自身

の音を定めるに、なお問題があろうと思われる。しかしながらスペイン語自身の音がいかなる音にせよ、その時期のその音が外国語にどのような音としてはいついっただかを考えようとするとき、この例はきわめて興味深いものとして考えられる。

諸家の一般的な見解は以上のものであるが、日本に來、または接したスペイン人の記録などには次のような資料が見られる。^{註21} セバスチアン・ビスカイノの金銀島探險報告には *isla llamada Ujima* とあるが、大島のことだとするとシが *ji* と書かれたことになる。また慶長17年の秀忠からノビスパンヤ王へ送った書簡の冒頭、日本国征夷將軍の訳（フライ・ソテロなどによる）が *Nipon-gocu Xey Jongun* となっており、征將の頭字が *x, j* になっている。1616年イスパニア国王から伊達政宗へ送った書簡では奥州が *Boju* となりまた支倉六右衛門が *Faxecura* と書かれ、フライ・ソテロの書簡評論では伏見が *Fugime* と書かれ、1605年に家康からフィリピン諸島長官へあてた書簡でも「我邦は神国と称し」の神国が *Xincoco* と書かれている。また1592年の比島長官ペレス・ゴメス・ダス・マリニヤスから秀吉へ出した手紙ではスペインの地名 *Jaen* が中国音で沙寅と書かれている。^{註22} これらはいずれも *x, j, g* などの問題の字が *さ* などの音であったことを示していると考えることができよう。

このように *さ* らしいものはかなり多いのであるが、一方古い音でない、または新しい音かと考えられるものもないわけではない。それは慶長17年にルソンの長官ドン・ファン・シルバが家康側近の後藤庄三郎にあてた手紙に「日本国大貯敷多輔甲毛羅」とあるもので、村上直次郎氏は「敷多是後藤なり、輔甲毛羅は庄三郎なり。ポルトガル風に *Joçabro* と書きしをイスパニア語の発音に依りてホカプロと読み、其音を漢字にて表現せしが故に此誤を生ぜしなり」と注されている。^{註23} これは確かに *jo* が *さ* と発音されていないものであろう。但し村上氏の注にポルトガル風に *jo* と書かれたとあるのには疑問があるので、ポルトガル語では *j* は昔から変わらず有声であってジョとなるはずのものであるから、これはポルトガル風だと見ない方がよいのではなからうか。この人名は「本光国師日記」に「後藤しやう三郎」とも見え、「駿府記」に「後藤少三郎」

ともあるのであり、前掲の種々の例からみてこの場合にも jo→ホと同時に、
ジョウ→jo という過程があったものとみてよいのではあるまいか。

また1592年比島長官から秀吉への手紙にイエルサレムが灰呂沙客となっており、これも古い音ではないとみられる。^{註24}このように新しい音は中国音を介したのものには現われることがあるが、そこには中国音自体のこともあり、また外国音の移し換えのときの移動もあって問題が二重になっている。^{註25}

以上のように x 類の音がまだ ʃ になっていない例が多いことから、江馬氏が「そのまま日本語になった」ということばで示されたように、スペイン語の xabon が当時の日本人にシャボンと聞える音であった公算は大きいと考えてよからう。

4 外来語としての音変化と語形

当時のポルトガル語スペイン語の発音が以上の通りであるが、次に考えるべきはそれらの外国音の日本語にはいるときの変り方である。日本語にない外国語音は日本語にはいるとき日本語化するわけであるが、その場合なんらかの習慣のあることがある。音の実体が彼我両者とも推定されている過去の言語どうしのそれについては特にこの点からの検討は重視されよう。

シャボンがポルトガル語であるとする、その語尾は -ão であるが、-ão の語尾をもっているものでポルトガル語から日本語に入ったものをみると、カピタン、カルサン、ジバン、パン、ボタン、サントメ、オルガン、インキリバンがあり、宗教関係のものとしては、イルマン、キリシタン、コンヒサン、コンチリサン、アチリサン、テナタサン、レズレイサン、レデンサンなどがある。ここで注意すべきは ão がすべて ア段+ン になっていることであって シャボン のようにオ段の音に写されたものは一つもない。サフランなどポルトガル語説とオランダ語説とあるが、仮りにポルトガル語に加えても同様である。ão は一般的には日本人にアンとして受け入れられたものであろう。従ってもポルトガル語から日本語にはいったとするならばこの語はその点できわめて例外的な取扱を受けたことを認めなければならない。シャボンをポルトガル語とするには、この辺が難点とならう。他の例をあげておられないが、村上直次郎氏が

「我邦ニハサバンノ形式ヲ見ズ。シャボンノ称アルハ西語ヨリ出デタルニアラズヤト思ハルル所以ナリ」といわれているのは、このことに関連するものであろう。但し、このような習慣にも例外がないとはいえないわけであるから、シャボン、サボンがまさにその唯一の例外であったと主張することもできなくはない。従ってこの点から直ちにポルトガル語でないと断定することもまたできないと思われる。

このことに関してはまた次のような仮定も立てられる。それは -ANE に合して -ão となった他の系統のものは名詞などでは単数形のものであったので、複数形の方は昔のが継承された。それゆえ単数語尾 -ão の複数形は一樣ではなく、いろいろの形式のものがある。たとえばキリシタン、イルマン、オルガンなどは -s を付加して -ãos となるだけであるが、カピタン、イシキリバン、パンなどは -ãos でなく -ães となり、その他のものは -ões と変るのであって、最後のものが最も多い。sabão もその中に含まれるから、その複数形はサボンイスとなるので、^{註26} そうするとサボンに似てくるわけであり、複数の形がはいったとも考えられるが、その他のものがすべて単数形アンではいっているのです、やはり例外である。もっとも、複数形のはいった語は外にある。メリヤス、コンタス、ヒリョウズがそうで、コンペイトウもそれかと疑われる。ところでそれらでははっきりと語尾の s がみられるが、サボンはそうではなく複数形特有の母音だけを残して -s を捨てたことになる。但しコンペイトウは語尾 -s の落ちた可能性がある。コンペイトウは明らかにポルトガル語であるが、語源として単数形を示す人と複数形をあげる人とある。複数になっても語尾に -s が付くだけであるが、これはポルトガル文中複数形で用いることが多いようであるから、複数形を示すべきかも知れない。もしそうなら -s が失われたわけであり、シャボン・サボンが複数形ではいったと仮定したときのその点での類例となる。

ここで、メリヤスなどが複数形であることには、それぞれ理由があるようである。メリヤスが複数形なのは、それがポルトガル語であるとしてもスペイン語であるとしても、もとの意味は靴下であり、靴下は両足にはくものである。コンタスは明らかにポルトガル語（あるいは非カスティール語）であるが、

単数形はロザリオの、つながれた玉の一つ一つをいうので、全体としては複数で言い表わすものである。ヒリュウズもスペイン語では常に複数形が用いられポルトガル語でも *-s* の形が用いられることが多いところから来たものであろう。これらの複数形のををはっきりととどめている語には、複数であることにそれぞれ理由があるようであるが、シャボンにはそれほどの理由があるかどうか疑問である。それゆえ、複数形がはいったと考えるのにも問題がある。

次に語尾から語頭に目を転じよう。語頭の *sa* は、他に例を求めると、サントメ、サラサ、サヤ、サルゼ、サントス、サントマリヤ、サカラメント、サキリヒシヨ、サセルダウテなどのようにサとなっており、サボンはこの点都合がよい。がシャボンは例外であって、*sa-* はサになるのが普通であり、サとシャの二様になるものは外にない。ジャボンとザボン、ガラサとガラシヤのなどはこれとは性質が違う。ジャボンはポルトガル語に *zamboa*, *jamboa* という二語形があるのでそのことを考えねばならず、^{註27} 同一の *za* がザ、シャの両様になったと断定することはできないであろう。ガラサはポルトガル語であるが、ガラシヤはオラティオをオラシヨというような当時宗教用語によくあったラテン語のポルトガル読みであったと考えられる。あるいはポルトガル語 *graça* に当るスペイン語 *gracia* であったかも知れない。それゆえこれらをシャボンと同一に扱ってはならない。*sa-* でなく *s*、その場合も考えると、これはあまり多くないが、スペリヨル、ススタンシヤ、ウンスン(?) などでも *s* であって *ś* ではない。このほかにサ行音でポルトガル語の *s* が国語で *ś* になっている例を求めると、setim のシチン、セテン、それにサテンがある。veludo がビロウドになるのならえば setim はシチンになろうし、Evan-gelho のエワンゼリヨにならえばセテンともなろう(セテンはあるいはオランダ語か)が、セもシも当時の日本語は *ś* で始まるので、*s* にはなり得なかったと見てよい。シエチンは問題であるが、これはジバン、ジュバンの例もあり、*se* が直接 *śu* に変わったのではなくそこに *ši*→*śu* という過程があったものであろう。従ってシセはサスソと同列に論ずるわけにはいかない。またサテンは明らかにオランダ語であろうが、もしポルトガル語としてもこれはサとなっていてシャとはならない。シ(エ)チンはポルトガル語でなく中国語であるという

人もあるが、もしポルトガル語であるとしても上述の通りである。^{注28}

このように見てくると *sabão* がサボンになったとみるには 例外的な点が存し、ましてシャボンになったとみようとすることは、更に珍しい例外としなければならぬであろう。

スペイン語であるとする場合には、一般にスペイン語から日本語にはいったことがはっきりしているのはメリヤス一語だといわれているのであるから、ポルトガル語だとしたときのように外に比べるべきものがないわけであるが、フランス語にはいった当時のドン・キホーテが、*s* であったのは、示唆するところが大きいように思われる。

5 結 び

以上のように、用例を見るとサボンの例も古いがシャボンの語形は更に古くまたその点からスペイン語でないともポルトガル語でないとも断定できないようである（但し、交渉の古い点からいえばポルトガル語の方に分があろう）。その音からみるならば、ボンに当る方はポルトガル語であるとする、ポルトガル語的でないあるいは例外的な点があるのに対し、スペイン語であると考えするには問題がない。その頭音シャはスペイン語のに近かったといえよう。但しサボンのサは明かにポルトガル語のに近い。それゆえシャボンについては、前田氏の指摘されたような点からスペイン語でないとするはできないばかりでなく、むしろ音としてはスペイン語にきわめて近かったことになる。スペイン語の可能性は従来考えられていたよりもはるかに大きいということができよう。少なくともシャボンに関してはポルトガル語よりもスペイン語の方が全体の形として近かったといえよう。あるいはシャボンの語源にはその一方だけでなく、スペイン・ポルトガル両言語語が関係していたと考えるとしても、音の面からはスペイン語の方が主流のものであったと結論してもよいと思われるほどよく似ている、といえよう。

従来スペイン語であると考えられてきた語にメリヤスがある。前田太郎氏はスペイン語であるといわれ、山田孝雄氏はポルトガル語であるといわれる。これについての永見徳太郎氏の「長崎の古老はめりやすといふよりもめいやすと

いふ人が今日でも多い」(南蛮長崎草)のことばを受けて荒川惣兵衛氏はメリヤスはスペイン語でメイヤスはポルトガル語であるといわれる。^{注29} ボンのところを無視してこの論理を適用するとすれば、シャボンもスペイン語でありサボンはポルトガル語であるということになるか(ボンを無視しなければサボンはそれだけポルトガル語から遠ざかるとみなければなるまい)。長崎の人西川如見はその「華夷通商考」にサボンの語形をしるし、古賀十二郎氏の長崎方言集にもサボンとあるところを見ると、そういう点でもメリヤス・メイヤスと(偶然かも知れないが)似ているところがあるといえないこともないようである。もしシャボンがスペイン語からそのままはいったのだとすると、サボンはそれがポルトガル語の影響を受けてまたはその他の理由で形を変えたものか、あるいはポルトガル語形がシャボンの影響を受けまたはその他の理由で形を変えたものか、あるいは何かの理由でポルトガル語形がそのような形ではいったものかのいずれかであろう。

[付記] シャボテン、サボテンの語源をシャボン・サボンに関連させる説がある。ただし他の説もあり、新しいものでは海南島語説(荒川惣兵衛、外来語辞典、アテネ文庫)、スペイン語説(辞海)などがある。もしシャボン+手(たとえば広辞苑)だとしてもそれならば日本語中に既にシャボンの語形が成立していたはずであるから、そのことがシャボンの語源に影響を及ぼすことはなからう。

注 1. 「日本外来語辞典」シャボンの項。前田太郎「外来語の研究」140頁。新村出「外来語の話」183頁。

2. ウイルキンソンの辞典に *sabun* は (cf, Ar. *sabun*, Port. *sabão*, Fr. *savon*) とあり、アラビア語の影響も考えられる。
3. 新村出「外来語の話」183頁、荒川惣兵衛「外来語学序説」58頁、榎垣実「日本外来語の研究」263頁、重久篤太郎「西洋語と国語」(国語科学講座)14頁。
4. 小倉進平「国語及朝鮮語のために」297頁、金田一京助「国語学入門」153頁、小林好日「国語学通論」233頁、岩淵悦太郎「国語概説」105頁、平山輝男「国語通論」171頁、松村明「国語概説」98頁。
5. 「南蛮宗俗考」225頁。
6. 国文学大講座。
7. 同一人が両形を用いている。
8. 辻善之助「増訂海外交通史話」723頁。
9. 同上。
10. O. Bloch et W. von Wartburg: *Dictionnaire étymologique de la langue*

- française. Paris. 1950.
11. E. Bourciez: *Eléments de linguistique romane*. Paris 1946, 403べ. W. J. Entwistle: *The Spanish language together with Portuguese, Catalan and Basque*. London 1948, 301べ。
 12. Entwistle 同上書, 502べ。
 13. Rafael Lapesa: *Historia de la lengua española* 増訂3版, Madrid 1955, 105べ。
 14. 日本関係のではたとえばセバステアン・ビスカイノの金銀島探険報告9章に *á pedir licencia y repuesta de la embajada al Príncipe* とあるのに, セビーリャ市インド文書館文書1612年のに…y *embajados al Emperador*…とある。
 15. Amado Alonso: *Estudios lingüísticos. Temas hispanoamericanos* Madrid 1953, 41べ。
 16. Bourciez 前掲書405べ。
 17. Amado Alonso 前掲書41べ。
 18. Bourciez 前掲書405べ。
 19. R. Menendez Pidal: *Manual de gramática histórica española*. Madrid 1952 (9版), 119べ。
 20. Rafael Lapesa: 前掲書241べ。
 21. 大日本史料, 異国叢書などによる。なお日西辞書でもシに x を用いる。
 22. 「沙」の中国音の頭子音は \mathfrak{s} の類である (頼惟勤氏のご教示による)。
 23. 増訂異国日記抄。113べ。
 24. 「灰」の中国音の頭子音は χ または f の類である (頼惟勤氏のご教示による)。
 25. たとえば人名 Juan に「羨」をあてたものなど。
 26. **Camões** は新村出「南蛮記」ではカモエンス, 「世界文学講座南欧文学編」(笠井鎮夫氏執筆)ではカモーンイス。 **sabões** は新村式ならサボエンス, 笠井式サボーンイス。語尾の -s は現代のリスボンの発音では \mathfrak{s} であるが, 17世紀以前は現代ブラジル語音同様 **s** であった。
 27. oa は ão とは異なる音である。
 28. 原語では語中や音節末の **s** が, 3で述べたように語頭のと少し違うものであったらしいから, それらについて比較しなかった。しかしそれを含めても結論は同じである。イソボ, カステラ, フラスコ, エゲレス, イスパダのように \mathfrak{s} にならない。イシキリバン, キリシタンは (ドチリイナに同じく) 母音 i のそう入によるためと考えたい。
 29. 荒川惣兵衛「外来語学序説」313べ。

